

[実践報告]

足寄少年自然の家における不登校生徒を対象とした 野外教育のとりくみ

—2002年夏—

小玉 功¹・舛田 仲永¹・加藤 幸子²・諫山 邦子²・奥山 洸²・加藤 敏之²

¹北海道立足寄少年自然の家 ²北海道教育大学釧路校

An outdoor education program for school refusers at Ashoro Children's Center

-Summer 2002-

Takashi KODAMA¹, Tomonaga MASUDA¹, Satiko KATO², Kuniko ISAYAMA²,

Kiyoshi OKUYAMA² and Toshiyuki KATO²

¹Hokkaido Ashoro Children's Center, Ashoro 089-3734, Japan

²Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

1. はじめに

北海道立足寄少年自然の家(以下ネイバル足寄)が主催する不登校の児童・生徒を対象とした事業については、2000年度夏に行われた取り組みの経過をすでに報告している(小玉・他, 2001)。この事業は不登校の児童・生徒を対象として、3泊4日の日程で行われ、深夜の雌阿寒岳登山を中心とする冒険プログラムを主な内容としたものであった。雌阿寒岳登山は豪雨のため3合目付近で中止されたが、自己概念や行動の自己評定では肯定的な変化が確認され、とりわけ活動の自己評定における疲労度は、身体的負荷が日程後半に強まるにもかかわらず、日を追って減少するという興味深い結果が得られていた。

ここで報告するのもネイバル足寄における不登校の児童・生徒を対象とした事業である。この取り組みは2002年度の夏、4泊5日の日程で行われ、マウンテンバイクによるツーリングとテント泊、いかだを用いた川下りを中心とする冒険プログラムを主な内容とするものであった。前回と同じく自己概念および行動の自己評定の資料を得たのに加え、今回は保護者による生徒の変化についての評定の資料も得た。しかしこれらについての報告は別途予定しているの、ここではプログラムを構成する個別アクティビティの評価を主として分析する。

個別アクティビティの評価の分析は、北海道立厚岸少年自然の家(以下ネイバル厚岸)で行われた不登校生徒を対象とする1998年度、および1999年度の事業について行っている

(奥山・他, 1999a; 奥山・他, 1999b; 菅原・他, 2000)。これらとの関連についても報告したい。

2. 方法

2.1 調査対象者

調査対象者を表1に示す。いずれも不登校の児童・生徒で、小学生5名(うち男子1名)、中学生27名(うち男子10名)、計32名(うち男子11名)である。

2.2 プログラムの概要と意図

2002年6月27日より7月1日までの5日間、ネイバル足寄、足寄町近郊の大規模草地および利別川を会場として実施した。不登校の児童・生徒32名の他に、ボランティア・リーダーの大学生8名、職員8名、計48名が参加した。児童・生徒は3~5名ずつ8班に分けられ、各班にはボランティアの大学生1名がリーダーとして加わり5日間の行動を共にした。活動は基本的に班を単位として行われた。表2は参加者に配布された日程の予定表である。

第1日目: リクリーションと野外炊飯が置かれている。ここでの目的は「自分を知る」、「相手を知る」という点にある。ゲームや炊事作業という共同の活動を通じて参加者自身が、自分はどうの姿勢で参加しているかを自覚すること、また仲間やリーダー、あるいは施設の職員がどのようなスタンスでキャンプを捉え、どのような態度で参加者に関わろうとしているかを知る

表1 調査対象者

	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	計
男	1				1	1	8	11
女		2	1	1	1	8	8	21
計	1	2	1	1	2	9	16	32

表2 日程表

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
6月 27日 木				受付 (13:00~13:30)			なかよくなるろう 野外炊飯			ふり かえり	入浴	就寝 準備	就寝				
6月 28日 金	起床 準備	つどい	朝食	キャンプに向けての準備をしよう (地図の読み方・マウンテンバイク練習・野営の練習・ 買いだし・装備の運び出し・確認・積み込み 作業・ミーティングなどを各班で行います)						夕食	ふりかえり 自由	入浴 相談	就寝 準備	就寝			
6月 29日 土	起床 準備	つどい	朝食	冒険キャンプ1日目「地平線の見える丘でキャンプをしよう」 (前日に準備した装備はトラックが運びます。参加した皆さんは、班 ごとに地図を頼りにマウンテンバイクで出発します。目的地は地平線の見 える丘。到着したら、テント設営、食事作り、満天の星を見ながらふり かえりなどをします。)										就寝	就寝		
6月 30日 日				冒険キャンプ2日目「いかだで利別川を下ろう」 (地平線を昇る太陽を見て、朝食づくり、テント撤収、出発 します。途中でいかだに乗り換えて利別川を下りながらネ イパルをめざします。)						後 か た づ け	入 浴	達成 パーティ	ふり かえり	就寝	就寝		
7月 1日 月	起床 準備	朝食	熱気球を上げよう (みんなの力で熱気 球を上げよう)	昼 食	ふり かえり	閉 会 式	解散 14:00										

ことが重要である。

第2日目:キャンプにむけての準備が主として行われ、これには地図の読み方の教授、マウンテンバイクやテント設営の練習、買い出し、装備の準備などが含まれている。この段階で行われる小集団での話し合いや共同の作業は施設内もしくはその周辺で行われ、また活動への積極的参加が欠けていても「何とかなる」余地が残されている。自己決定と小集団活動へのゆるやかな挑戦、そしてその結果を確認することがこの段階での目的となる。

第3日目:翌日の第4日目と共にプログラム全体の主要部分である。自転車によるツーリングとテント泊という冒険的アクティビティが連続して行われ、参加者はその中で様々な葛藤と向き合うことになる。ここでの自己決定と小集団活動への取り

組みには、もはや「何とかなる」余地は残されていない。翌日の活動まで見通しながら「どうすれば帰ることができるか」を真剣に考えなければならない。そのようなぎりぎりの状態に追い込まれた中で、自分は何をやるうとして何ができたのか、周りの人間はどうであったのかを見つめる機会が与えられることになる。

第4日目:前日に引き続き冒険的アクティビティとして、いかだを用いた川下りが行われる。ここでは自己決定、小集団活動での様々な葛藤をくぐり抜けて成功する体験が用意される。「無事に帰る」という成功の体験である。このことによって、自分自身、そして周りの人間への肯定的な見方が生まれることが期待される。ぎりぎりの状態を経ながらも最終的には成功体験を保障することが不登校の児童・生徒には重要であると我々

は考える。

第 5 日目:熱気球の立ち上げ・浮上と上空からの遊覧というアクティビティが置かれている。これまでの活動が班別の小集団を基本としたのに対して、これは参加者全員が取り組む大集団での共同作業である。大きな集団の中でも自分自身を見失うことなく活動に取り組み、そのことを通じて連帯感・達成感を体験することを意図したものである。彼らは大規模草地や利別川の流れを俯瞰しながら、それぞれの出身の街や学校の方向を見定めることだろう。それは、4泊5日のキャンプの経験を糧として、明日から再び始まる日常生活をたじろぐことなく見据えようとする想いと重なるはずである。

2.3 生徒による個別アクティビティの評定

開始の当日、4泊5日の間に実施が予定されているさまざまな活動(個別アクティビティ)に対する事前の期待の程度を見るために、これらの一覧表を提示し、「特に楽しみにしている活動」、「楽しみにしている活動」を数に制限することなく選択させた。同じく事前の不安の程度を見るために、「特に不安に感じる活動」、「不安に感じる活動」を選択させた。その際、数の制限や期待する活動との重複記入の制限はしなかった。また最終日、個別アクティビティに対する事後の印象を見るために、「特に楽しかった活動」、「楽しかった活動」、「特に良かった活動」、「良かった活動」、および「特につらかった活動」、「つらかった活動」を選択させた。ここでも数の制限や重複記入の制限はしなかった。

この他に、事前と事後における自己概念の自己評定、毎日の活動の自己評価、事後における保護者による生徒の変化についての評定も行ったが、これらについては別途報告する予定である。

3 結果

3.1 実際の経過

第 1 日目:「リクレーション」では、4種類ほどのアイスブレイク・ゲームを行った。その後、班毎に集まり、キャンプネーム(キャンプ中に自分が呼ばれたい名前)を決めた。「野外炊飯」ではカレーライスを作った。具材はリクレーション中のゲームで勝った班の順に好きなものを選んだ。この日の「ふりかえり(就寝前に班毎に集まり、1日をふりかえりながらリーダーと班員が話し合う)」では、「班を変えてほしい」という複数の意見が出たため、全体の集会でも話し合った。その結果は、当初決めたとおりの班編成でこれからも過ごすこととなったが、これらの背景には班を構成する男女の人数比という問題、小学生と中学生、キャンプ経験者と未経験者が混在する問題、あるいは出身校(学級)の人間関係がそのままキャンプに持ちこまれ

ている問題などがあると思われた。

第 2 日目:「つどい(朝食前に施設利用者全員が交流する短時間の集会)」は、高校生集団と合同で行ったが、遅刻者が職員から注意を受ける場面があった。「キャンプの準備」では3日目の自転車によるツーリングに向けて地図の読み方の練習やルートの設定、4日目の川下りに向けてロープワークの練習、キャンプの装備を車へ積みこむ作業を行った。また、自転車で足寄町内に出かけ、買い物をしたが、これにより自転車をあつかう各自の技能や体力を確認することができた。

複数の参加者から体調不良や「帰りたい」という訴えがあり、個別にカウンセリングが行われた。翌日のツーリングで目的地にたどり着けるかという不安が主な内容だった。こうした不安感を背景にして、準備作業自体は非常に集中して行われた。

第 3 日目:「キャンプ」は自転車によるおよそ30kmのツーリングとそれに続くテント泊という2つの内容を含んでいたが、全体を通じて時計を用いないで生活するという条件、一切の行動を児童・生徒の判断で行うことを条件とし、リーダーは安全の確保のみに専念した。ツーリングは10:30までに全ての班が発発し、最初の班は14:30に目的地である大規模草地に到着した。最後の班が到着したのは18:00であった。

班毎にテント設営と野外炊飯・食事となったが、班によっては昼間のツーリング中に生じたトラブルから班員相互の協力や交流が順調に進まないところもあった。そこで全体の「ふりかえり」を行う中で、職員の方から、現在が日程の途中であること、今日の反省を明日に生かしていくことが大切であることを話した。その後は満天の星を見ながら話し合う姿が班毎に見られた。

第 4 日目:時計を使わないという条件のもとで、起床はおよそ3:30、朝食の開始が5:30、テントの撤収を終えてツーリングを再開したのが8:30頃であった。「川下り」を開始する利別川のいかだ乗り場には先頭の班が10:45、最後の班が11:50に到着した。いかだの組み立ては班毎に行ったが、安全確保のため全体で一斉に出発した。13:30に出発し、目的地のあしよる橋下には16:40に到着した。途中気温が低下し、疲労とも重なって身体的負荷は相当に強かったものと思われる。「達成パーティ」は職員側で用意した焼肉とおにぎりを食べながら、焚き火を囲んで話し合うという単純な企画だったが、班毎に、また班を越えて交流する姿が随所に見られた。

第 5 日目:「熱気球」の立ち上げ・浮上と上空からの遊覧は、風が強いと、パイロットから中止の勧告があった。しかし、一切の行動を児童・生徒の判断で行うという原則を尊重し、中止の可能性を含みながら立ち上げ・浮上の作業に取り組むか、荒天用の代替プログラムを行うかの判断が児童・生徒に任せられた。班毎の話し合いの結果、「熱気球」に取り組むこととなった。しかし、風が止まず、立ち上げの機会がないまま作業途中

表3.1 アクティビティに対する評価—楽しみ（事前）—

順位	特定アクティビティ	Mean(SD)	順位	一般アクティビティ	Mean(SD)
①	野外炊飯	1.34(0.64)	①	自由時間	1.47(0.66)
②	キャンプ	1.13(0.74)	②	就寝	1.25(0.71)
③	達成パーティ	1.09(0.72)	③	入浴	0.97(0.73)
④	川下り	1.03(0.92)	⑤	仲間との交流	0.94(0.75)
⑤	熱気球	0.94(0.83)	⑤	リーダーや職員との交流	0.94(0.75)
⑥	リクリエーション	0.81(0.68)	⑥	つどい	0.59(0.65)
⑦	キャンプの準備	0.56(0.56)	⑦	ふりかえり	0.44(0.50)
全体を通して					1.06(0.79)

注1：2点満点の評定結果である。

注2：N=32。

表3.2 アクティビティに対する評価—不安（事前）—

順位	特定アクティビティ	Mean(SD)	順位	一般アクティビティ	Mean(SD)
①	川下り	0.81(0.85)	①	仲間との交流	0.66(0.85)
②	熱気球	0.75(0.83)	②	リーダーや職員との交流	0.59(0.78)
③	キャンプ	0.69(0.81)	③	ふりかえり	0.56(0.66)
④	リクリエーション	0.50(0.66)	④	つどい	0.53(0.61)
⑤	キャンプの準備	0.47(0.56)	⑤	入浴	0.38(0.60)
⑥	達成パーティ	0.31(0.53)	⑥	自由時間	0.31(0.63)
⑦	野外炊飯	0.22(0.41)	⑦	就寝	0.25(0.56)
全体を通して					0.66(0.85)

注1：2点満点の評定結果である。

注2：N=32。

表3.3 アクティビティに対する評価—楽しさ（事後）—

順位	特定アクティビティ	Mean(SD)	順位	一般アクティビティ	Mean(SD)
①	達成パーティ	1.78(0.41)	①	自由時間	1.72(0.57)
②	キャンプ	1.47(0.83)	②	リーダーや職員との交流	1.59(0.65)
③	川下り	1.44(0.70)	③	仲間との交流	1.56(0.66)
④	野外炊飯	1.16(0.75)	④	入浴	1.25(0.79)
⑤	リクリエーション	0.97(0.68)	⑤	就寝	1.00(0.87)
⑥	キャンプの準備	0.88(0.70)	⑥	つどい	0.63(0.74)
⑦	熱気球	0.78(0.78)	⑦	ふりかえり	0.56(0.61)
全体を通して					1.66(0.64)

注1：2点満点の評定結果である。

注2：N=32。

で中止された。

3.2 個別アクティビティの評定結果

個別アクティビティの評定で、「特に楽しみにしている活動」、および「楽しみにしている活動」として選ばれたものに、それぞれ2点、および1点を与えた。選ばれなかったものは0点とし

た。同様の処理を他の評定結果の全てに対して行い、それぞれの平均と標準偏差を表3.1より表3.5に示した。その際、特定の日時に限って1回だけ行われるものを「特定アクティビティ」、原則として毎日行われるものを「一般アクティビティ」として区別した。

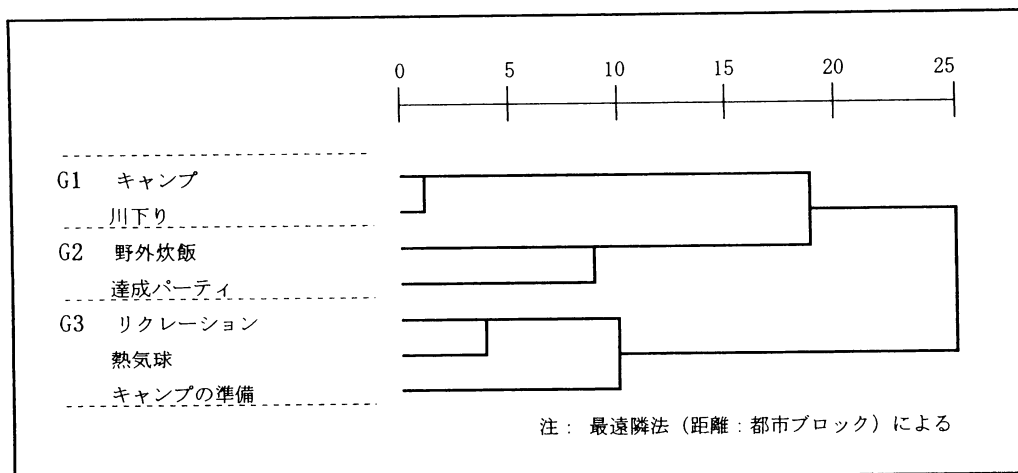


図1 特定アクティビティのクラスター分析

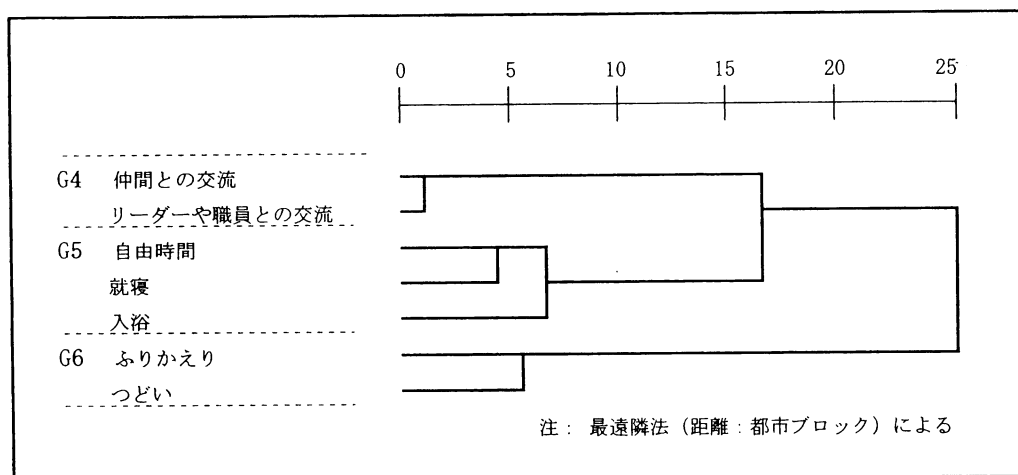


図2 一般アクティビティのクラスター分析

表3.4 アクティビティに対する評価良さ（事後）

順位	特定アクティビティ	Mean (SD)	順位	一般アクティビティ	Mean (SD)
①	達成パーティ	1.34 (0.81)	①	仲間との交流	1.25 (0.79)
③	キャンプ	1.22 (0.78)	②	リーダーや職員との交流	1.19 (0.85)
③	川下り	1.22 (0.78)	③	就寝	1.09 (0.80)
④	野外炊飯	1.13 (0.78)	④	自由時間	1.03 (0.85)
⑤	熱気球	0.88 (0.78)	⑤	ふりかえり	1.00 (0.79)
⑥	リクリエーション	0.81 (0.58)	⑥	入浴	0.97 (0.88)
⑦	キャンプの準備	0.75 (0.71)	⑦	つどい	0.84 (0.75)
全体を通して					1.63 (0.65)

注1：2点満点の評定結果である。

注2：N=32。

表3.5 アクティビティに対する評価—つらさ(事後)—

順位	特定アクティビティ	Mean(SD)	順位	一般アクティビティ	Mean(SD)
①	キャンプ	1.47(0.79)	①	ふりかえり	0.41(0.70)
②	川下り	1.16(0.83)	②	仲間との交流	0.28(0.57)
③	キャンプの準備	0.84(0.71)	④	就寝	0.19(0.53)
④	熱気球	0.31(0.68)	④	つどい	0.19(0.39)
⑤	リクリエーション	0.21(0.48)	⑤	自由時間	0.13(0.41)
⑥	野外炊飯	0.19(0.46)	⑥	リーダーや職員との交流	0.09(0.29)
⑦	達成パーティ	0.13(0.41)	⑦	入浴	0.06(0.24)
	全体を通して				0.97(0.77)

注1: 2点満点の評定結果である。

注2: N=32。

表4.1 特定アクティビティ群に対する評価

	G1	G2	G3		
	キャンプ	野外炊飯	リクリエーション		
	川下り	達成パーティ	熱気球		
			キャンプの準備		
	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)	分散分析	多重比較
(事前) 楽しみ	1.08(0.66)	1.22(0.57)	0.77(0.48)	F(2, 62)=10.54**	G1>G3, G2>G3 (MSe=0.16)
(事前) 不安	0.75(0.67)	0.27(0.41)	0.57(0.52)	F(2, 62)=14.44**	G1>G2, G3>G2 (MSe=0.13)
(事後) 楽しさ	1.45(0.63)	1.47(0.47)	0.88(0.53)	F(2, 62)=23.43**	G1>G3, G2>G3 (MSe=0.16)
(事後) 良さ	1.22(0.71)	1.23(0.66)	0.81(0.53)	F(2, 62)=9.86**	G1>G3, G2>G3 (MSe=0.19)
(事後) つらさ	1.31(0.69)	0.16(0.29)	0.46(0.42)	F(2, 62)=58.36**	G1>G2, G1>G3, G3>G2 (MSe=0.20)

注1: ** p<.01

注2: 群毎の平均点を素点とした。したがって2点満点である。

注3: N=32。

表4.2 一般アクティビティ群に対する評価

	G4	G5	G6		
	仲間との交流	自由時間	ふりかえり		
	リーダーや	就寝	つどい		
	職員との交流	入浴			
	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)	分散分析	多重比較
(事前) 楽しみ	0.94(0.66)	1.23(0.47)	0.52(0.51)	F(2, 62)=20.52**	G4>G6, G5>G6, G5>G4 (MSe=0.20)
(事前) 不安	0.63(0.76)	0.31(0.46)	0.55(0.62)	F(2, 62)=4.11*	G4>G5, G6>G5 (MSe=0.21)
(事後) 楽しさ	1.58(0.55)	1.32(0.57)	0.59(0.51)	F(2, 62)=48.76**	G4>G5, G4>G6, G5>G6 (MSe=0.17)
(事後) 良さ	1.22(0.76)	1.03(0.67)	0.92(0.72)	F(2, 62)=3.22*	G4>G6 (MSe=0.22)
(事後) つらさ	0.19(0.35)	0.13(0.23)	0.30(0.45)	F(2, 62)=3.04 [†]	G6>G5 (MSe=0.08)

注1: [†] p<.10 * p<.05 ** p<.01

注2: 群毎の平均点を素点とした。したがって2点満点である。

注3: N=32。

3.3 評定結果のクラスター分析

特定アクティビティは「リクレーション」、「野外炊飯」、「キャンプの準備」、「キャンプ」、「川下り」、および「熱気球」の7個である。それぞれに対して、「楽しみ」、「不安」、「楽しさ」、「良さ」、および「つらさ」についての平均値が得られている。これらの資料をもとに、距離を都市ブロックとし、最遠隣法を用いてクラスター分析をした結果が図1である。7個の特定アクティビティは、「G1:キャンプ・川下り(以下G1)」、「G2:野外炊飯・達成パーティ(以下G2)」、および「G3:リクレーション・熱気球・キャンプの準備(以下G3)」の3群に分類されたとと言えるだろう。

同様に、一般アクティビティについてクラスター分析をした結果が図2である。7個の一般アクティビティは、「G4:仲間との交流・リーダーや職員との交流(以下G4)」、「G5:自由時間・就寝・入浴(以下G5)」、および「G6:ふりかえり・つどい(以下G6)」の3群に分類されたとと言えるだろう。

3.4 特定アクティビティ群に対する評価

クラスター分析の結果に基づいて、それぞれのアクティビティ群に対する評定値を新たに定めた。例えば、G1の「楽しみ」についての評定値は、「キャンプ」と「川下り」の「楽しみ」についての評定値を平均した値を個人毎に求めてこれに当てた。同様の操作を特定アクティビティの3群について、「楽しみ」、「不安」、「楽しさ」、「良さ」、および「つらさ」の全ての指標にわたって行った。その上で、それらの平均と標準偏差を求め表4.1に示した。ここには指標毎の平均値の差についての検定結果も併せて示した。

G1は「楽しみ」、「楽しさ」、および「良さ」という肯定的な意味の評定値が比較的高く、「不安」、および「つらさ」という否定的な意味の評定値も高い。この群は今回のプログラム全体の中心に置かれた冒険的なアクティビティから構成される。「不安だったけれど、楽しかった」、「つらかったけれど、良かった」という内容の評価を得たことは適切な結果と言えるだろう。G2は肯定的な評定値が比較的高く、否定的な評定値が低い。この群の食事を共にしながらの交流という内容からすれば妥当な結果であろう。そして、G3は肯定的な評定値が低く、否定的な評定値が比較的高い。この群の「リクレーション」、「キャンプの準備」はプログラム全体、ないし他の個別アクティビティの準備的な活動であり、「熱気球」は天候の悪化のために完結しなかった活動である。肯定的な評価とならなかったことが、了解できる。

3.5 一般アクティビティ群に対する評価

一般アクティビティの3群について、上と同様の処理をした結果が表4.2である。

G4は肯定的評価値が高く、否定的評価値も比較的高い。こ

の群は人との交流という共通の内容を含み、不登校の児童・生徒を対象とするこのプログラムの中では重要な意味を持つ。これが、特定アクティビティの中心的位置にあるG1とよく似た結果を得ていることは興味深い。G5は肯定的な評定値が比較的高く、否定的な評定値は低い。共通して負荷の少ないこの群のアクティビティに対しては、了解できる結果である。G6は肯定的な評定値が低く、否定的評価値が比較的高い。G4の具体的内容の一つがG6であると思われるが、G4とG6は類似した結果となっていない。G6の公的な集会という側面に反応したのかもしれない。

4 おわりに

今回のキャンプ全体を通じて、参加者が相互に、またリーダーや職員と率直な議論を行った場面がいくつかあった。第1日目には「班を変えたい」という要求に応えた話し合いがもたれ、結論は「当初の予定通り」ということだった。しかし、ここでは結論の如何にかかわらず、自己決定の原則にもとづいた話し合いの場が保障され、そこでの真剣な話し合いが行われたことそのものが重要であろう。また第5日目には荒天のもとで「熱気球を揚げるかどうか」ということが話し合われ、最終的に参加者は「揚がらない」ことを半ば予想しながらもあえて「揚げよう」という結論を下した。わずかな可能性に向けて協力し最大限の努力を傾けようとするこうした姿はキャンプ開始の当初は見られなかったものである。このようなアクティビティの質的側面を見逃してはならないだろう。

今回の調査法に関しては、当面以下の検討が必要である。

1. 個別アクティビティに対する評価の調査票は実際には14個のアクティビティ名を列挙し、さらに「全体を通して」1項目を加えた15項目の一覧表という形式であった。ここではそれを特定アクティビティ7個、および一般アクティビティ7個に分け、それぞれについてクラスター分析を行った。今後は調査票そのものを「特定」と「一般」の категорияに分けた形式にすることが必要かもしれない。
2. ネイバル厚岸における1998年、1999年の実践の分析で事後の評価は「特に良かった活動」、「良かった活動」、および「特に悪かった活動」、「悪かった活動」というカテゴリを用いていた(奥山・他, 1999a; 菅原・他, 2000)。今回の事後の評価はカテゴリの数も増え、内容も従来と一部が共通しているのみである。しかし、クラスター分析の結果を見ると、これらのカテゴリは肯定的か否定的かの二値的な意味に集約されているように思われる。調査票の形式を従来の簡便なものに戻すことも考えなければならない。
3. ネイバル厚岸における1998年の実践の分析では、適応の程度の異なる生徒集団の、特定アクティビティに対する評価の

違いを比較した(奥山・他, 1999b)。今回は調査対象者についての情報が十分ではなかったため、このような比較ができなかった。こうした情報を集約することが今後の大きな課題である。

文 献

- (1) 小玉功・舛田仲永・加藤敏之・諫山邦子・奥山洸(2001): 足寄少年自然の家における不登校生徒を対象とした野外教育のとりくみ. 環境教育研究, 4-1, 83-89
- (2) 奥山洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊地和孝・森敏隆(1999a): キャンプ経験が不登校生徒に与える心理的影響. 野外教育研究, 3-1, 25-36
- (3) 奥山洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊地和孝・森敏隆(1999b): キャンプの個別プログラムに対する不登校生徒の評価. 環境教育研究, 2-1, 19-26
- (4) 菅原利昭・小玉功・森敏隆・斎藤詔司・諫山邦子・奥山洸・加藤敏之(2000): キャンプの個別プログラムと不登校生徒. 環境教育研究, 3-1, 51-58